
人形の探し物

猪口零斗withクローバー ～ハイテンション姉妹～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形の探し物

【Nコード】

N8110I

【作者名】

猪口零斗 with クローバー ー ハイテンション姉妹 ー

【あらすじ】

魔力を持った不思議な石”封印と増幅の石”によって意思を持ち自由に動き回る人形のいる世界。魔法使いの人形、ルイはひょんなことからその封印と増幅の石を失くしてしまう。

アレが、悪者の手に渡ったら大変なことになっちゃう！

ルイは、クマのぬいぐるみのデイを巻き込んで石を探す旅に出る。途中で出会った様々な謎と、仲間と、事件。

二人（二体？）の旅の結末は――？

プロローグ

「プロローグ」

「あー大変だ大変だー！」

「落ち着けよ。」

バタバタと帽子を被った人形が走っている。何かを探しているようにも見えるあわてぶり。

俺の名前はデイ。茶色いクマのぬいぐるみなんだが、これまた話せるんだよなー。その気になれば戦えるし。必殺技もあるし。つまりは動く人形。

で、さつきからあわてているのは帽子を目深にかぶり、杖を持っている人形のルイ。こいつも話せるし、魔法も使える。オレと同じ動く人形。

「つーか、何が大変なんだ？」

オレは、いつまでもバタバタ走り回られたら鬱陶しいからなんで走ってるか聞いた。

「あのね、ボクが大事に大事にしていた宝石がないのー。グスン」
ルイは手を目元にやり泣きはじめた。それぐらいで泣くなよ…。まったく。

ん？までよ…。あいつが大事にしている宝石ってまさか！

「おい！まさか、封印と増幅の石じゃねえだろうな？」

「うん。それ」

何事もなかった様に返事をする。涙も何もない。さつき泣いたのは何だったのだからあー！！

「バ…バカやろう…。アレが悪いやつの手に渡ったら、大変なことになるぞ？というか、お前は石を体の中に入れなかったのかい！よく動けたな！」

俺達動く人形は石によって動いている。大半の人形は体の中に入れている。

「そうだねえ…。」

なんだよその態度は！あの石だぞ？ルイは何てことない顔しやがって…。

取り戻さないと大変な事になる。あの石は、ルイと繋がっている。あの石からルイが離れると、力が暴走してしまうし動かなくなる。まだ動いているからまだ近くにあるのか…。

「ねえ、デイ。一緒に探しにいこうよ。ボク一人じゃ心配だもん…。」

……。確かにそうだが、俺は関係ないからなあ。行きたくねえな……。でもアイツ一人じゃ心配だし……。でも行きたくないし……。

「行くよね？絶対行くよね？じゃあ、行こうか。」

「あ……。ああ。」

俺の腕を引っ張って、あるき出した。俺に拒否権なしかい！
そついうわけで俺達は冒険の旅に出た……。

プロローグ（後書き）

実は、この小説は猪口零斗が書いたものではありません。
妹であるクローバーがある日、私のアドレスへと送ってきたもので
す。

せつかなので発破かけて最後まで書かせて曝すことにしました
↑

もちろん、本人には許可を取ってあります。

それでは、クローバーが描いた人形達の不思議な旅路にどうぞお付
き合ってくださいませ。

最初の敵

第一章 最初の敵

ザッザッザッザ……。ボク達が歩く音が聞こえる。

「あー、つかーれーたー」

「うるせえ。」

「なんだよう『うるせえ』はないでしょ。『うるせえ』は。」

「うるせえ。」

ものすごく怒った顔と声で答える。あ、ボクはルイ。石を探してデ
イと旅をしているんだけど……、

「暑い!!」

「うつせえうつてるだろ!」

そう、ここは砂漠のと真ん中。もちろんボク等は人形だから水とか
は要らないけど、でも暑い。

「おい。」

ボクの方に顔を向けた。眉間にしわがある。

「なーにー?ただでさえ暑いのに、暑苦しい顔向けるんじゃないよ。」

「

「俺はそんな顔してねえ!つか、お前は女なんだからもう少しお
しとやかにできねえのか!」

……。おしとやか?ボクは首をかしげながらデイに聞いた。

「おしとやか?なにそれ、美味しいの?」

「……。バカ」

答えてくれないー!!

と、まあこんな風に歩いているんだけどさあ、ほんとと暑苦しい顔
を向けないでよね。余計暑くなるんだから……。こんな暑いときにさ
あ、敵が出で来ると、ボツコボコにしているんだよね。ま、ボクは魔
法で?涼しくしてるから快適なんだけど。
いきなりデイがボクに話しかけてきた。

「おい、おまえ魔法で自分だけ涼んではないだらな？」

ギクツ。ボクは一瞬動きが止まった。

「凶星か…。ま、死んどけ。」

ボカツ、バキツ、ドゴオ。ディはボクを殴った。

「イッツツタアアアアア」

「さ、いくぞ。」

ボクのことは気にも留めないで歩き出した。バカツバカツバカツ。

「心の中でどーせバカとか考えてるだろ。」

いきなりボクの方を向いてボクの思っていることを当てた。

「え？何でわかるの？デリカシー？」

「テレパシーな。お前がわかりやすいだけだ。」

すっごーい！でも、乙女の心の中は覗かないで♪キャ♪

それから小一時間ほど歩くと変なホコラに着いたの。

「ねえ、今更なんだけど、言いたいことがあるの…」

ボクが小声で言うといは呆れた様に、

「ん？言ってみろ。どーせくだらないことだと思うが。」

「怒らないでね。あのね、あの石壊れてバラバラになってるの。そ

の欠片が此処の中にあるの。」

ボクは身構えた。この後ボクを殴りに来るだろうと思ったからだ。

「……。そうか。」

アレ？殴らない。変なの。ま、いいか。

ボク達はホコラの中に入った。すると邪気がすごい。きっと、力がボクみたいに封印じゃなくて、増幅だと思う。

「戦闘態勢に入っとけ。たぶん強い。」

「うん。わかった。」

ボクは杖を握り締めた。かなり緊張している。念の為にバリアーをはつといた。

大きな扉の前。ここが邪気が一番強い。多分奥に敵がいると思う。

ボクは気を引き締めた。ボクだって、やる時はやる。

「行こう。敵を倒そう。」

「あ、ああ。（なんだこいつ、いつもと違う…。殺気がすげえ。）
ギギイ……」

扉が開くと、人がいた。いや、人じゃない。悪魔？尻尾と、黒い羽が生えている。これが邪気の正体か。

「よく来たね。僕の名前は、デル。君たちの名は……、まあいいや。僕の遊び相手になってよ。言っとくけど、僕、強いよ？だって、これが僕の力を増幅してくれるの。」

と、石の欠片を手にしている。やっぱりそうだったか。横を見ると、デイが構えている。

「ルイ、準備はいいな？行くぞ？」

「うん。」

ボク等は、デルに襲いかかった。

「【炎竜】さあ、こいつに焼かれな！」

杖から炎の竜が出てきて、デルを襲った。

「へっへーん。そんなの効かないよーだ！」

敵は、炎竜をよけた。

そう、これがボクの魔法。自然の竜を呼び出し、敵にぶつける。まあ、他にも在るけど。

「僕の攻撃を受けな！【落雷】！」

敵は、手を上から下に下ろした。すると、ボク達に雷が落ちた。

「地面よ我等を守りたまえ。【鉄壁】」

ボコ！ボコボコ！

僕達の周りを囲むように鉄らしきものが囲む。

「残念。外れ。そして俺の存在を忘れちゃあ困る。秘技！【雷聖拳】

（らいせいけん）」

ドン！バリツバリツ。

雷聖拳は、相手を殴り、雷を発生させる技。けっこー痛い。

「つつー」

「手ごたえあり。」

あ、口元緩めた。キモイ……。ま、止めを刺しますか。

「【三竜】さ、終わりだよ。」

「ああああ！」

クリティカルヒット。命中。そして敵は倒れた。

「ヒュー」さっすがー」

「まーねー。これぐらいできないと。えっへん！」

ボクは胸を張った。

それからボク等は、欠片を拾った。

「あーあ。これじゃあ、まだまだ多いな。」

「うん。そうだ！一緒に来てよ！来るよね？うん！来い！」

「命令するんじゃないねえ！ま、行くけどよ。」

「やったあ！」

ボクは喜び、ホコラを出た。

暑かった。でも、そんなこと気にしなかった。

また、ボク等は歩く。他の欠片を集めて。

さあ、次はどんなのが待ち受けてるんだろう。ワクワクしながら、

ボク等の旅は進む…。

新しい仲間

第二章 新しい仲間

「ねえ、デイ。この欠片どうしよう…。」

ボクは手に入れた欠片を持ちながらデイに聞いた。

「落とさないようにどっかにしまっとけ。」

「だーからー。そのしまう場所がないのー。」

「知るか！」

そんな会話を何時間も続けているんだけど…。

『知るか』ってなんだよーう。ひっどーい。

悪魔のデルを倒してからというもの、欠片が見つからないの。

欠片が一つあれば大体の場所はわかるんだけど、反応がないんだよなー。

「なあ、何で石は壊れたんだ？」

「ああ、ボクが落として壊しちゃったの。その欠片が色々なところに飛び散っちゃったの。テヘ♪」

ボクは可愛いポーズをとった。けど、

「『テヘ♪』じゃねえ！」

「キヤーこっわーい。」

ボコ！×13

「あーいたい。」

「お前な…。魔法でガードするんじゃない！こっちがいてーだろ！」
デイはボクを殴った手を押さえながら言った。ボクを殴った罪だあー。

「ゴッメン。」

「お、町だ。」

ボク等の目の前には、大きな？（ボク等人形から見たら）町があった。
都会っぽい風景がある。

ボク等が此処に来たわけは、仲間集めだ。デイが言うには此処にデイの知り合いが居るらしい。

「ほら。早く入るぞ。」

「う、うん。」

大きな門を入ると、賑っている繁華街があつた。

デイがこつち来いつて言つたからついでいくと、酒場に着いた。

「アレー？昼間からお酒？体に悪いよ？」

「違う。此処に俺の知り合いが居るんだ。」

なーんだつまらないの。なんて言つたら、怒られるから言わなかつたけど。

ギギイ。ザワザワ

「お酒の匂いがすごい……。」

「おい！デイじゃねえか！こつち来いよ！」

どこからか大きな声が聞こえた。と、その途端酒場が静かになった。

『『『『『デイ！？』『』『』『』』』』』

みんなが声を揃えてデイの名前を呼んだ。

「何？有名人？」

聞くとデイは、

「おう。ただいま。」

と、いった。無視された。

『その隣にいるねえちゃんはおめえの彼女か？』

「いいえ。違います。」

ボクはぴしゃりと言ってやった。ボクが、アイツの彼女？あり得ない……。

「おい、バカは居るか？」

『バカか？居るぞ？』

「どこだ。」

『バカではありません。ナイトです。』

奥から出て来たのは、髪が少しカールして、それを後ろで一本結び、体に鎧をつけ、腰に細い剣をさした人形だった。騎士かな？

「おや？貴方にもとうとう彼女ができました？」

「ちげえ！こいつはただの知り合いだ！」

デイが強く言った。やっぱ嫌なんだ。

「そうですか。つまらないですね。で、私に何の用です？」

「また、俺と旅しねえか？人手が足りないんだ。」

腕を組みながらナイトとか言うやつに話してる。

「え？この人が一緒に旅する人？」

また男か……。女も入れてよね。プンプン。

「まあいいですよ……。その代わりそのお嬢さん……。私がお嬢さんの白馬の騎士になっていいですか？」

ボクの前にひざまづいて、どこからか薔薇を出してきた……。

なんか、キモイ。

「ルイ。無視しとけ。こいつの名前はナイト。まあ、見て通りのバカだ。」

「バカとは失礼な。貴女は、ルイさん……ですね？とてもお綺麗で。よろしくお願いします。」

ぺこりと深くお辞儀をした。

「あ、うん。よろしく。」

ボクも少し頭を下げた。何だかな……。バカだな。

「あ、ねえデイ。なんでさあ、君が入ってきたときに、皆が声をそろえて君の名前を呼んだの？有名な人の？」

ボクはデイに聞いたのにナイトが、

「それはね、デイは昔にこの町にきた魔物を倒したんですよ。その魔物はとても強く、私達ではとても敵いませんでした。だけど彼は、たった一人でその魔物を倒した。その姿はとても勇敢でこの町のヒーロー的な存在になっているのです。」

デイは、腕を組みながらそっぽを向いている。少しだけ顔が赤い。照れてるんだ。

「へー。すごいね。さっすがデイ！」

ボクはもつと赤くしてやろうと思い、褒めてみた。

「……。あ、あのぐらい朝飯前だ！」

そんな意地っ張りにボク等は笑ってしまった。

ボク等の仲間が増えた。とても変な人形。さあ、強さはどのくらい？

ディとルイの出会い

第三章 ディとルイの出会い

私はお二人に出会ってから気になっていたことを聞いてみました。

「ところで、なぜ貴方達は出会ったのです？と、言うかどんな風に会ったのです？」

私がディとルイ様に聞くと、ルイ様が、

「話すと長いよ？良いの？」

「私は構いませんが。しかし、ルイ様は、とても愛くるしい。嗚呼、今日もとても美しい。」

「ハイハイ。うざったいから止めてね。あと、様付けはやめて。」

「……。わかりました。では、お嬢様、ディとの出会いを教えてくださいますか？」

お嬢様は、その呼び方もなあ、とか言いながら話し始めました。

嗚呼私の出番がない…。

ボクは体の中に石を入れていたんだ。盗られないように。けどその所為でボクはいつも追われている始末。石が目当てのドロボーにね。まあボクはそれらを倒していたんだけど、めっぼう強い奴等に周りを囲まれたんだ。逃げ場がなかったの。ボクはかなりの数の敵と戦ったから、疲れていても魔法も出せなかった。

『クク。さあ大人しく石を渡しな。もうお前は何もできまい。』

「なぜボクの石なんだ？他の石でも力の増幅や、体を動かすことが出来る筈だ。」

ボクはその問いを、何度も何度も繰り返してきた。そして皆こう答える。

『あんたの石はかなりの魔力があり、そして強くなれるからだよ。』
と。皆必ず石は何かしら持っているはずだ。そのおかげで動けることが出来るから。

ボクはその答えを聞くと少し固まってしまった。なんでボクはこんな石を持ってしまったのだろうと考えていたからだ。その時敵は切りかかってきた。避けきれない。ボクは死んでしまうのか？

『おいおい。女の子相手にその人数はないだろう？』

どこか気だるそうな声が聞こえた。トコトコとこっちに向かってきたクマの人形。

『お前は誰だ？こいつの仲間か？』

敵はボクを指しながらそいつに聞いた。

「いーや。そいつは知らないが、女の子がやられそうなんだ。此処は男の俺が助けないとなあ？」

うんうんと、うなずきながら話していた。ボクはね、そいつのことは最初嫌いだっただの。だけど助けてもらって、解った。あいつは、仲間を失ったことがある。だから誰かまわす助けたいんだと。

「さーて、俺の相手をしてくれるかなあ？クズ！」

トントンとはねながら挑発をしていた。

『誰がクズだああああああ』

あいつらはクマの人形に向かったの。でも一瞬でやられた。強かった。

「弱っ。……。大丈夫か？」

「え？ボク？」

「お前以外に誰がいる。ああそうだ。答えたくないなら答えなくてもいいがお前、封印と増幅の石を持つ人形か？」

ボクは、戦闘体制に入ったが、すぐ止めた。あいつはボクから石を奪う気はないと思ったからだ。

「……。そうだけど。君もボクからこれを奪うの？」

「いいや。興味ねえ。だが、お前と一緒にいれば敵に困らないな。興味ない。初めて聞いた。ボクは目を丸くしてしまった。」

「……。つまりボクと仲間になりたいと。そういうこと？」

「ああ。俺はディ。武道家だ。仲間になって良いか？」

「いいよ。ボクはルイ。魔法使い。よろしく。」

ボク等は自己紹介をして旅に出たの。

「ということ。」

私は驚いてしまった。彼女が持っている石はとても珍しいのだと始めて知ってしまったからです。

「おい、ルイは何で俺が大切な人を亡くしたとわかったんだ？」

「ああ、私も不思議なんですけど、何故なんですか？」

私達が聞くとお嬢様は、首をかしげながら、

「えー？だってデイの戦い方がそうだもん♪」

鋭いお嬢様だ。一時期デイと旅をしていてその時に大切な人を亡くしてしまいましたもんね。

「……。やっぱお前すげえわ」

「へっへーん。すごいでしょう？」

「ええ。とてもすばらしいです。」

お嬢様は鼻を高くしている。嗚呼今日も美しい（二回目）。

三人でそんな話を話しながら歩くと私は敵の気配を感じました。おそらく2人も気づいたんでしょうか。私達は戦闘態勢に入りました。お嬢様は杖を前に出し、魔法を出す準備。デイは構えていて精神を統一している。私は剣を抜き、切る準備を。

「ねえ、そこ居る人形？出てきなよ。」

お嬢様の言葉に反応して、ざっと10人ほどでできた。

おそらく石を狙っているのだと。

『さあそこのお譲ちゃん？大人しく石を渡しな。』

「嫌だ。」

きっぱり答えると敵は襲い掛かってきた。

「【風竜】ほらほら、避けないと飛ばされるよー！？」

お嬢様の杖から風を纏った竜が出てきた。それに当たった敵は飛ばされてました。なるほど。だてに石を持っていますね。強い。

『ふん。まだまだいるぞ？』

な！後から後からぞろぞろと出てきました。多勢に無勢。不利です

ね。

「バーカ。必殺！【炎の竜巻】！」

ディは逆さになり回転した。そこから炎が出てきて、敵を焼いた。

『くつ。次は俺達の番だ！行け！【百列切り】』

百人ほどの剣を持った人形が私に襲い掛かってきた。私の敵ではないですね。

「遅い。【オウム返し】」

私の技で敵は居なくなった。

「結構強いね。驚いた。」

お嬢様は目を丸くして驚いておりました。

「とうぜんです。お嬢様をお守りするんですからこれ位じゃないと。」

「

お嬢様のお手を取り、ひざま付くと、

「おい。ナイト、お前こいつにぞっこんなのはいいが、嫌がつてるぞ？」

「……。そうですね、でも私はお嬢様とお守りするために生まれて来ます……。」

私が言い終わらないうちに、お嬢様が私を魔法で飛ばしました。嗚呼やはりお強い。

「さ、行こう！」

「いや、ナイトは？」

「いいの。早く来ないと置いていくよー？」

「……。酷い。」

敵？仲間？

「第四章」敵？仲間？

「おーい？どこに行くのおー？」

相変わらずだらしねえ声をしてやがる。

今ナイトが焚き火から離れようとしている。ナイトが飛ばされてから一週間がたった。最近、アイツの様子がおかしい。毎日のように夜、俺達の所から離れるし、町に行くにしてもとても離れている。

「ちよつとした野暮用ですよ。明日の朝には帰ります。」

「ふーん。……。ねえ、毎日どこに行くの？町にしてはとても遠いし、誰かに会いに行ってるの？」

鋭い。アイツは勘だけは良いが、とぼけているからな。俺が釘を刺しとくか。

「ナイト。ルイの答えに答えなくていい。だが俺の質問に答えろ。」

「いいですよ。なんですか？」

ルイは嫌そうな顔をしていたがすぐに止めた。俺の気配を察知できたのか真剣な顔つきになった。

「お前は……。いったい毎夜何してる？もしかして裏切りのために敵に情報を流してるのか？」

それを聞いた奴は吃驚した。もちろんルイも。

俺は今までに何度この言葉を言おうとしたか。

アイツは昔からそうだった。ほかの仲間からの敵に情報を流していると言う噂を聞いた。

「何を言ってるの！ナイトは多分裏切らないよ！」

「お嬢様、多分は余計です。そしてデイ、この私が貴方たちを裏切るとでも？」

俺は間髪入れずに、

「ああ。」

「根拠はどこに？」

ナイトが真剣な声をして、そして怒りのこもった声で俺に聞いた。
「……。勘だ。あと昔のお前の不自然な行動から。」

「昔は昔、今は今ですよ。貴方達が私を疑うなら、私はもう貴方達から離れません。」

さすがにイラついてきたのか早口だった。

「わかった。俺等から離れるな。怪しい言動をするな。いいな？」

「ええ。」

ギスギスした空気のまま俺達は寝た。この会話が誰かに聞かれていると知らずに。

『ボス。私はしばらく動けません。しかし、あの少女が石を持っていることは確かです。』

『そうか。ご苦労だった。あまり派手な動きはするな。あと石が盗れる様だったら欠片全てを持って来い。』

『御意』

あれから一週間。ナイトは俺たちから離れなくなった。だがまだ少し怪しい。ルイの欠片について色々聞いてくる。敵と内通しているとか…？

「ねえ、ナイトはデイの知り合いならさあ、ボクも友達を仲間にしていい？」

この空気をなくすかのようにルイが明るい声で言った。

「お嬢様のお友達…！それはそれはご覧になりたいですね。」

ナイトもいつも真剣だった顔がゆるくなった。

「別に俺はかまわないが、戦えるのか？」

「うん！」

うれしそうにうなずきながら答えた。仲間が増えるのはいいが、その分俺が守ってやらないと。もう誰も失いたくない。

ルイの案内でホコラについた。あれ？ここって、悪魔のデルと戦ったところ？いや、違うよな……。

ルイの友達がアイツ？悪い予感がする。当たらないでくれ。が、俺の願いもむなしく、

「あのね、ボクの友達はデルだよ♪ディは知ってるでしょ？」

「あのなー！アイツはもともと敵だぞ？」

「そだよ？何が悪いの？」

首をかしげながら聞いてくる。てめえなあ…。

『やつほー。ルイじゃん♪。そっちの新しいのは誰なの？』

聞き覚えのある声。俺の思った通り、悪魔のデル。だった筈が……！？

「こいつはナイト。で、この悪魔の人形はデルって言うんだ♪」

「よろしく！」

「ええ。こちらこそ。」

何ふつーに握手してんだああああ！え？何？アイツ人形だったの？マリオネット人形だったの！？

「おい、ルイ。ちょっとこっち来い。」

「えー？」

俺は腕を引っ張って、2人から離れた。

「おい、なぜアイツは人形になってる？そしてなぜお前らは仲良しなんだ？そもそもアイツとはもともと敵同士だったじゃねえか！」

「えー？デルはねえ、もともと人形だったんだけど、欠片のせいで本物の悪魔になったの。でね、ボクはデルを倒した夜に会いに行つたの。話を聞くと本当は良い子なの。だから♪」

ねっ♪とか良いながら人差し指を立てている。むかつく。

俺たちが戻るとあいつ等は寢床の準備をしていた。しかも楽しそうに。いや。嫉妬とかじゃねえからな！？つーか、誰に言ってるんだ！？俺……。

「お帰りー。今日はゆっくり話をして明日出発しようよー♪僕も準備があるし。」

「ああ、かまわねえがお前、あの石なしで戦えるのか？」

「戦えるもん。ブン。」

腕を組み、そつぽを向いた。ムカつくなあ、このパーティ。

「まあまあ、ゆっくりお話でもしながら休みましょう。デイも精神を休めないと倒れますよ？」

ぼんぽんと自分の横を叩きながら言った。あいつの言った通りだ。少しは羽を伸ばすか。

色々な話をしながら夜は更けていく。俺は羽を伸ばしすぎてナイトが小さく舌打ちをしたことに気が付かなかった。ルイとデルは能天気な、ナイトは隠し事を持ちながらポーカーフェイスを保ち、俺は思いを抱えて、欠片を探す旅にまた出た。

『台本に沿って私の壮絶なストーリーが進んでいく。さあ悲劇の主演はお前たちです。ルイ、デイ。悲しみに心が満たされるが良い。』

裏切り

「第五章」裏切り

僕等4人はルイの勘を頼りに欠片を探している。今いるパーティーは、魔法使いのルイ。こいつは僕等が旅をするきっかけを作った張本人だ。

で、デイ。ルイといっつも一緒にいるがなんだか掴めないバカで、アホな奴。

キザな奴がナイト。ルイ達曰く、かなり怪しい奴らしいが、僕はよくわからない。

最後にボク。この4人で旅をしているんだけど、僕らに敵う奴がなかなか出てこない。久々に骨のあるやつが出てきたと思ったら、ものの1分で倒しちゃうんだもん。最高で20人位かかってきたけど僕等があつという間に倒してしまった。だから最近敵が来ない。それにデイがイライラしているから僕はつまんないの。

「ねえ、ボクの石が近いよ。」

ルイが僕達に言った。間髪入れずにデイが、

「どこだ。」

怒りの籠った声で言う。最近パーティーが崩れ気味だ。

「もー。怖いなあ。そんなブンブンしないの！めっ！」

いや、『めっ』って、小さい子に言い聞かせるんじゃないんだから……。

「そうですよ。そんなギスギスしていたら幸福が逃げますよ。」

「うるさい。で、欠片はどこだ。」

うわあ、殺気がすごい。

「あっち。洞窟の奥らへん。」

洞窟の入り口を指しながら言った。

「行きますか。」

「ああ。」

「うん。」

「イエッサー。」

僕等は洞窟に入った。入ったと同時に変な感触がした。いきなり世界が変わったような……。

それから10分ほど歩いているんだけど、なんか同じところを歩いているような気がしてならない。

無限回廊ってやつかな？そんなことを思っていたらルイが、

「ねえ、これ無限回廊だよ？このまま歩いても仕方がないよ。」

僕の勘は当たった。ルイは魔法を使うからそういうのに敏感って言うてた。

「そうですね。入ったときに変な感じがしたのはそのせいでしょうか。」

「そうかもしれないな。ルイ、ちょっと調べてくれ。」

「えー？イヤだよーう。」

あ、デイがルイに殴りかかった。デイのギスギスした気配がなくなった。ルイはこれを考えていたのかな？……。ありえないか。

「調べないとこのままだよ？僕も手伝うから調べよ！」

「もー。デルが言うから調べるけど、今度はデイも手伝ってよ！ナイトも。」

「ああ、それは失礼しました。」

「今度な。」

ナイトはぺこりとお辞儀をしながら、デイは腕を組みながら答えた。それから僕等は色々調べた。すると一箇所だけ魔力が強いところがあった。

「ここを破壊すれば多分出れると思う。だけど、かなり硬いと思う。一発で壊さなきゃもつと硬くなって破壊できなくなるよ。」

ルイが言うにはこういう魔法がかかった道は一箇所だけ魔力が強く、そこを壊すと魔力が解除されるらしい。

「あ、じゃあ僕が行くよ。」

「大丈夫ですか？私が行きましようか？」

「いや、ナイトはルイに良いとこ見せただけだろう。ここは武道家の俺がいく。」

僕らは言い合いになり、結局僕がやることになった。

「じゃあやるよ？【鉄の雨】」

羽を鉄にして、一箇所に打ち込む。攻撃力はかなりある。

「お、壊れた。」

壁が壊れると、無限回廊はなくなり、普通の道になった。

「じゃあ、行きましようか。」

珍しくナイトが先頭になった。いつもは後ろにいるのになあ……。

この洞窟に着てから早く先に進みたいって感じ。なんかあるのかな？

先に進むと広い部屋にたどり着いた。前の扉は閉まっている。と、

僕らが入ってきた扉が閉まった。

「しまった……！罠ですか！」

敵が来る。そう皆は思ってた戦闘体制に入ったが、何も起こらない。

「何も起こらない……。」

デイが構えを解いたとき、ナイトが、切りかかってきた。

「……なっ！」「」

ナイトの剣はデイの体に突き刺さった。綿がいつぱい出てくる。（

血はないからね？）デイは目を開きこう言った。

「やっぱお前は裏切り者か。ナイト……！」

片目をつぶり、ナイトの剣を握った。

「……デイ！」「」

僕はとつさに身構えた。ルイを守るため。前に、デイから自分に何かあった場合はルイを守れと言われたから。ルイはその場にへなへなと座り込んだ。

「クク。貴方たちはほんつと無防備ですね。誰もいない部屋で何も出ないなら疑われている私が怪しいでしょう？」

ナイトは剣を抜こうとした。が、剣はデイにつかまれているせいで抜けない。

「デイ、デイ……。」「」

ルイは顔を抑え、泣きながらデイの名前を読んでいる。デイはにやりと笑っているが、ナイトの剣はデイの石に刺さっている筈だ。人形は中にある石が壊れたら動かなくなる。人間で言う、心臓や脳の働きをしている。

「ナイト！お前、もともと僕らを裏切るきたっただか！」

「ええ。でもお嬢様は壊したくないですから、洗脳でもかけて私の傍に居てもらいましょうか。」

余裕を見せているが、ナイトの剣はデイに突き刺さったままだ。

「ルイ…、デル…。コイツ…を、たお…せ…。お…れは…も…うだめか…もしれ…ない。だったら、さ…いごま…で…あが…いて…い…きて…や…る…。」

途切れ途切れに言葉を発しながら話した言葉。僕が、デイの傍に行こうとしたら後ろからすごい殺気が感じられた。ルイの殺気が。

「ナイト！ボクの友達を！お前は許さない！」

杖を構えとても長い詠唱を始めた。ルイの魔法は長い詠唱は必要ないはず……？ルイの足元に魔方陣が浮き出てきた力の暴走が始まったらしい。デイ曰く、ルイは暴走すると、魔法陣を出すらしい。

怒りで暴走状態になったらしい。たった一つの欠片じゃあ、押さえられないな。

「ナイト！僕はお前を殺す！」

「ええ。お嬢様……。いや。ルイ！」

デイの体が倒れたと同時に、ナイトの剣が抜かれた。僕はデイの体を持ちながら、少し離れたところにいった。

戦いと悲しみと

第六章 戦いと悲しみと

「デル。手を出さないでね。必殺！【4竜】（しりゅう）」

杖から赤、青、黄色、緑の竜が出てくる。ボクは自然の竜を4つ一気に召喚した。これは暴走時にしか出ない技だ。

「きれいな竜ですね。私も負けませんよ！《聖剣突》（せいけんづき）」

ナイトは剣を平行にして、四回ついた。一発ずつ竜に当たったが、それぞれ二つに分かれたただけだ。

「……。効果なしですか。」

ナイトに襲い掛かっている竜をよけながら言った。ボクは正気を失っているからナイトが詠唱をしていたのに気がつかなかった。

「ルイ！危ない！」

僕が我に帰ったとき、ナイトの剣から竜巻が出てきた。その竜巻は竜を倒し、ボクに向かってきた。

「さようなら。ルイ。」

ナイトが薄く笑った瞬間、ボクの力は完全に解放され、目の色は赤と緑になった。ボクはとっさにバリアーを張り、攻撃から身を守った。

「なに！まだ力があつただと！？」

ボクは、杖を弓に変形させ、

「デイの仇！【矢の雨】」

ボクは空高くジャンプし、下に向けて矢を放った。ナイトは剣でそれらを斬ろうとしたが、そう簡単には切れない。矢は魔力で作ったんだ。魔力で作ったものは魔力で作られたものしか切れない。が、

「何で切れるの！？」

ナイトは矢を全て斬ってしまった。ボクは着地し、弓を剣に変えて、ナイトに斬りかかった。

「この剣も魔力で作りました。ルイは剣も扱えるんですね……。が、貴方の本業は魔法使い！私は 騎士！剣の扱いは誰にも負けませんよ！？」

ガキン。剣の音が響く。ボクの本業は魔法使いだけど暴走すると剣も扱える。そのままボクらは切りあいをしていた。お互い小さな傷が増えてきたころナイトがジャンプをし、高いところから切りかかってきた。

「死ね！【人魚の一撃】！」

「嫌だね。」

ナイトは上から人魚のように落ちてきた。ボクはナイトの剣を頭の上で受け止めた。そのまま、

「【ツバメ返し】！」

ナイトに深い一撃を与えた。そのままナイトは倒れ込み、僕は剣を杖に戻して、

「これで最後だ！【虹の光】（にじのひかり）」

杖から七色の光線が出てきてナイトに直撃した。

パキン……

静かに石の壊れる音が聞こえた。

「バ……力な……。この……私……が負け……。など……。だが……わたし……くし……のうし……るに……。」

そのままナイトは砂になり、朽ちていった。意味深な言葉を残してボクら動く人形は石を破壊されると砂になって、跡形も無く消え去ってしまふ。

「デイ！デイは！？」

ボクはデイとデルの元に駆け寄った。ボクがデイを抱えると、デイが片目を開けて、

「ルイ……。お前……。さ……今……憎……。し……み……。で……こ……。ろ……が……。い……つ……。ぱい……。だろ……。？……。そのに……。く……し……み……。を……。け……。せ……。じゃ……ない……。と……。俺は……。安……心……。して……。行……け……。ねえ……。だ……。か……ら……。憎……し……。み……。で……。こ……。ろ……。を……。い……つ……。ぱい……。に……。す……。る……。な……。。」

ボクは目に涙をためながら、

「嫌だ……。死んじゃあいやだよ……。」

「デイ、死なないで……！」

ボク等は願った。でもその思いも虚しく、

「……。泣く……なよ……。みれ……んがで……きる……だ……ろ……？じゃあ……な……。生まれ……かえつ……た……ら……ま……た……いっ……緒に……たた……か……おう……な……？」

これがデイの最後の言葉だった。デイの体は砂になり、ボクの手から離れていった……。

「いやだ！！逝くな！ボクを残さないで！ボクはどうしたらいいの？ねえ？離れないでよ！デイ！」

「うつつ。デイのばかあ……。先逝くなよ。僕等だけじゃあ、面白くないんだよあ……。」

ボクは叫んだ。デイの名前を何度も呼びながら……。

それからというもの。ボクは抜け殻のようになり、デルは傍にずっといてくれた。

「なあ、元気出せよ……。デイはあの世で心配しているよ？」

「そ……だね……。」

あれから欠片はデルが採ってきてくれて、四つになった。だけど、僕はそれを受け取る気持ちにならなかった。デイが死んでからデイの石はボクが持っていて、自分の石はこれだといって受け取らなかった。

「なあ、気持ちちが沈んでいるところ悪いけど、何でおまえは石が壊れてもそのままでいるの？」

ボクはゆつくりとデルのほうを向いて、

「……。ボクの石とボクの体が特別だから……。」

「そうか。」

デルは静かに下を向いた。僕らはナイトの書いた台本ど通りになっ
てしまった。ボクらはこれからどうなるんだろう……。このまま朽

ちていくのか？それとも、台本から外れられるのか？どちらにしてもボクらはナイトの手によって悲しみと絶望のどん底に落とされた。

立ち上がれ！新しい仲間と！

「第七章」立ち上がれ！新しい仲間と！

あれから二ヶ月がたった。でもルイはあのまま。この二ヶ月で僕は立ち上がったけど、ルイはまだだった。少しは立ち直ってきたけどね。僕は欠片をさらに六つにした。ルイはそれを受け取るようになった。ルイを見るととても心がちくちくする。

『あそこにいるのはルイ！？』

どこからか声が聞こえた。ルイの名前を呼んでいるから知り合いか？

「お前は誰だ！」

僕がルイの前に立ち戦闘態勢に入った。が、

「デル……。その子は敵じゃないよ……。仲間。信用していい。ね？ サラ？」

サラと呼ばれた人形は、一見、お嬢様に見えた。僕と同じマリオネツト形の人形。フルートを持っていた。

「ルイ！？ デイは？ それにどうしたの？ やつれているよ！？」

タタタツとルイの元に駆け寄った。

「デイは……。二ヶ月ぐらい前に……。死んじやった。」

「……。そっかあ。それでルイはこんなんに。」

ポロツと、涙を流した。あいつもデイの知り合いか。

「君は誰？ ルイの友達？」

サラって子が僕に話しかけてきた。

「うん。デルって言うんだ。よろしく。」

「よろしく。あたしはサラ。楽器使いよ。」

僕等は握手をした。それからサラはフルートを出し、

「二人とも。悲しんでちゃデイの浮かばれないよ？ あたしが曲を吹くから曲が終わるまで悲しんでいいよ。でも曲が終わったらもう悲しんじゃだめ！ いい？」

彼女の言うことははもつともだ。僕等はうなずきサラは美しい音色

を奏でた。

10分ほどで音色がとまった。不思議と心が落ち着いて、立ち直れるようになった。

「ありがとう……。サラ。ボクはもう平気だよ。ディ……！だから安心してオヤスミ……。」

笑顔を見せて、ルイは立ち直った。あとからサラに聞くとサラの奏でる音色な色々は作用があるらしい。

「ねえ、あたしも仲間に入れてよ！」

「いいけど、何で？ボクの石の欠片を探すたびだよ？」

「ディがいない今、おとぼけのルイを何とかできるのはあたししかないっしょ！」

「失礼だなあ。」

二人で笑った。ルイの笑顔を見るのは久しぶりだ。それから僕等は色々話した。ナイトの裏切り、ディの死……。途中で涙を流したけど、それでも笑った。ディが死んでもまもなくの痛々しい笑顔ではなくきれいな笑顔。

「サラはさあ、どんな攻撃をするの？」

僕が聞くと、

「あたしは、フルートを奏でて、曲ごとに作用が違うの。」

「そうそう。中にはこわーい曲もあるよ！」

くすくすと笑い夜は更けていった。

朝僕らは大勢の敵と会った。

『おや？ナイトがここに戦えなくなったルイがいると聞いたが、きちんとしているじゃないか。』

ナイト！？あいつは死んだはず……。なぜここでディが死んで、戦えないルイがいると伝えられた？

まさか……。生きてるとか？

「お前ら……。ナイトの仲間か！？」

『だったら？』

「……倒してやる！」「」

僕ら三人は声をそろえていった。サラはフルートを奏で始めた。

『こんなときにのん気にフルートを吹いてていいのかなあー？』

サラに襲い掛かるうとしたが、敵の動きが止まった。

『う…動けない…？』

「のん気に吹いてないよ？【呪縛の音】（じゅばくのね）」

なんかこつちまで縛らせそうな曲が聞こえる。

「【滝竜】（そうりゅう）」

ルイが技名を言うと、滝のように竜が落っこちてきた。

『くつ。行け！あいつらを倒せ！』

次々と切りかかってきた。さすがにこの人数は多すぎ。

「僕も負けてられないな。【水剣】（すいけん）」

水でできた剣を持ち、切りかかった。

時間はかかったけど、何とか倒した。ナイトの仲間だけあって結構強かった。色々聞き出したかったが、そんな暇は無かった。

ナイトは生きているのか？石は元に戻るのか？そんなことは僕らは知らない。ただただ前に進むだけだった。

ほのぼのパーティ

第八章　ほのぼのパーティ

あたしがルイたちの仲間になってからルイは変わった。デイの死から立ち直り、前よりも明るくなった。デルって子は、もともと自力で立ち直ってみたいだけとまだ悲しそうだなぁーと思うわけよ。

「ねえ、欠片ってあと何個？もしかしてかなりある？」

あたしがルイに聞くと、

「ん？知らない。でも欠片の大きさから予測すると、あと10～15ぐらい？」

「多すぎ！」

ルイはまぬけた返事をしたけど10個～15個は多すぎでしょう！
？どんな壊し方をしたのよ！

「全部集めるの大変だろ？」

「そうかもね。」

……。おいそこのお二人さん？なにのんきに『大変』とかいつてるの？貴方たちのんきすぎる…。

こんなんで大丈夫なの！？

「……。来た。」

「何が？」

いきなり言い出したもんだからあたしたち声をそろえちゃったじゃない。

「敵。」

「あ、ホントだあー」

「いや。あんた達のものきでしょう……。」

次々と敵が襲い掛かってくる。それらをあたしたちが切ったり、音で倒したり、魔法で追っ払った。最近の敵は弱すぎてつまらない。だから最近ほのぼのしていて緊張感が無い。

「ねえサラ、強い敵出してよ？」

「は！？無理だから！」

いきなりルイが言い出すもんだからびっくりしちゃった。

「だいたい、あたしのフルートはできないこととできることがあるの！
「なあ、石はどこだ？最近ルイの反応がないが、ちゃんと石のある方向に歩いてるの？」

「それもそうね。どうなの？ルイ。」

あたしが聞くと、ルイはビクツとした。まさか……。

「えーと？何の事かなあ？」

「わからないで歩いてるのかい！」

どうやらあたしたちは当てもなく歩いていたようだ。

今までの苦労はなんだったのよ。まだ石はあるんだから！

とかあたしが思ってたら、ルイがうーんと考えている振りをしていた。

そう。振り。本当に考えているわけではない。あたしはルイと一緒にいた時があった。ルイの行動はわかりやすくてなんか逆にイラつく。

「でもこっちにあるような……。無いような……。」

「どっち！？」

まただ。どうやらあたしとデルは気が合うようらしい。

それからあたしたちはルイをボッコボコにして、野宿をするところを決めた。

「じゃ、話をまとめよ？このままだと何も進まないから。」

「リョーカイ！」

あたしが二人に話かけると声をそろえて言った。

「どうやらデルは声をそろえるのが得意？らしい。」

「えーと今の状況をまとめると、石の欠片が六個集まっている。そしてルイが反応をしない。かなり広い範囲を歩いても反応しないってことは……。」

あたしが話し終える前にルイが、

「残りのやつはほかのやつの手によって僕にばれないようにしてい

と思う。」

と、いうことは、すこし大変なことになっているってことか。
てか、わかってるなら、さっさといいなと思う。

「じゃあ、どうすんのさ。わからないなら手のうち用が無いじゃん。」

「デルの言う通りだわ。ルイ。なんか手はある？」

うーんと今度は真剣に考える。

10分たつと、

「わかんない。てへっ」

とかわいらしいポーズをとった。むかついたからまたボツコボコに
してやった。

痛い痛い言ってるが無視をして、そのままねた。もうこの調子じゃ
あ何も進まないと考えたから。

このとき、あたしたちはもう残りの欠片がある人物の手によつて集
められ、ルイの大切な人を生き返らせると、知る由も無かった。

『ボス。ご命令どおりに死んだ振りをしてきましたが、デイを殺し
たあと、新しいサラという音使いが仲間に入ったようです。』

『ふむ。そいつは強いのか？《ナイト》』

『……。音は防げないので強いほうだと思われます。』

『そうか。あと、石はまだか？さっさとしろ。』

『すみませんボス。石はほかのやつの手によつて集められたよう
です。』

『なに！？それは本当か！』

『ええ。そいつの名は、人形師《由布璃》（ゆうり）。私や、ルイ、
サラ、デルなどを作った張本人です。』

『確かそいつの名前は偽名だったな。ナイト。本名を調べ、そいつ
が何のために石を集めてるか調べてこい。』

『御意』

人形師由布璃

第九章 人形師由布璃

俺は嘉慶^{かきよう}。小さ目の胸当てに、少し大きめの剣をさしている。周りからヤル気のなさそうな人形といわれている……。ルイとサラの知り合いだ。たった今、あいつらを見つけたんだが、話しかけられない。なぜかって言うと、

「あんたねえ！あたしたちがどんだけがんばってその果物を採ってきたと思ってるの！？」

「そうだよ！ボクたちが苦労したのに、デルが食っちゃうんだよ。ひどい！」

そう、二人がデルって子を殴ったり蹴ったり、ただいま絶賛喧嘩中だ。あそこに俺が入ったら殺される……！

「だって！そこらへんにあつて、お腹すいていたんだもん！」
なんか、幼稚な争いだな。

そんなわけで俺は木の陰にいるわけよ。さて、どうしたものかなあ……。下手したら見つかるし、とかいって、今出てくると殺されるしなあ……。

「もう！ボクもお腹すいた！あれ、貴重な果物なのにい……。……。
ん？」

やべー！ルイがこっちを向いた。ばれたか？つか、黒いオーラが……。こえー。女は皆怖いなあー。

「どうしたの？ルイ。誰がいる？」

「うん。あの木の陰にいるから、ボク、つれてくるよ。【呪縛】」
やばい！魔法使ってるから体が動かない。殺される……。

「あれ？嘉慶じゃん。こんなとこでなにやってんの？」

「あ、いや、たまたまお前たちを見つけたんだ。」

「ふーん。こんなとこじゃなくてこっちに来なよ。」

何とかごまかせた。そのままルイは魔法を解いて、俺を皆のところ

に引つ張った。

サラが俺のことを不審者扱いしないかと内心ビビッてたが、大丈夫だった。いや、サラは俺がいると時々不審者扱いするからなあ……。

「ん？この剣士は誰？」

「俺は、嘉慶。お前の行った通り剣士だ。よろしく。」

俺はそういつて、手を差し出した。

「よろしく。僕はデル。基本は魔力で作った剣か素手で戦う。」

握手をして、俺は二人のほうを見た。

「なあ、お前ら女三人（？）じゃ大変だろ？俺も行こうか？」

「……。僕の石集めなんだけど。」

……。ああ、封印と増幅の石だっけ？なんかそれが欠片になったていう噂は聞いたな。

「べつに。最近暇なんだ。俺も行くからな。」

「ハイハイ。あたしはどうでも良いけど、デルは？」

「僕も良いよ。つか、このパーティ、ちよくちよく変わるな。」

そんなわけで俺はこいつたちと一緒にいることにした。

日が沈んできたので俺たちは、寝る準備をして色々話した。

次の日、

「……！あつた。かすかに石の反応が。」

「どこ！？」

すぐさまサラが返事をする、

「あつち。由布璃のいるところ。」

「……ええ！？」「」

おお。はもった。

つて、由布璃のどこ？え？なに？ここって由布璃の近くだったの！？

「何で由布璃が？」

「さあ？まあ、行ってみようよ。」

「ああ。」

「うん。」

「会いたくないけど。」

それぞれ返事をしてルイのあとをついていった。

一時間ぐらいたつと、一軒家があった。由布璃の家だ。周りはほつれた人形や、新しくできた人形でいっぱいだった。

「相変わらずだね。何にも変わっていない。」

デルがぼつりと言った。確かにそうだった。俺がここから出たときもこんなだったからなあ。

「いこつか。」

「うん！」

テクテクと列の後ろに入った。それからしばらくすると、中に入れた。

ちょうど俺たちで終わりだったらしい。後ろには誰もいなかった。こつちに人が来る。おっとりとした目。黒い長い髪。和服を着たその女性はまさに由布璃だった。

「おや？ルイに、サラに、デル、嘉慶じゃないの。久しぶりね。見たところどこもほつれていないようだけど何かよう？」

「あのね。僕の石の欠片はここにある？」

すぐにルイが聞いた。すると由布璃は、

「あるよ？つて、デイは？」

「……デイは、ナイトに殺されたんだ。僕は何もできなかった。」
デルが下を向いて握りこぶしを作った。俺はデイを知らないからよくわからねえが、あの三人にとっては大事な人形だったらしい。特にルイは。

「まあ、そんなこともあるよ。ああ、ルイのもつ石つて、人形を生き返らせるほど力があるよ？まあ条件はいっぱいあるけど。」

「……ええ！？」

俺以外が声をそろえた。

あるものとは？生き返らせる条件とは？俺たちはこのあと由布璃に大事なことを聞かされる。そして、由布利にとあることを頼まれ、過酷な戦いが始まるのはこれからの話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8110i/>

人形の探し物

2010年10月16日00時01分発行